

第14回 日本マレーシア研究会（JAMS）研究大会 プログラム

大会委員 鈴木陽一

開催日：2005年12月17日（土）・18日（日）

会場：上智大学四谷キャンパス（JR 中央線・東京メトロ四谷駅すぐ）
9号館2階249号室

会場へのアクセスは以下の URL をご覧ください。

http://www.sophia.ac.jp/J/sogo.nsf/Content/access_yotsuya

大学構内の地図は以下の URL をご覧ください。

http://www.sophia.ac.jp/J/sogo.nsf/Content/campusmap_yotsuya

12月17日（土）

13:00ー 受付開始

13:30ー13:40 開会の辞

13:40ー17:30 第1セッション 「脱植民地化をめぐるって」

13:40ー16:00 報告

マラヤ共産党とマラヤ独立、北カリマンタン共産党とマレーシア結成
原不二夫（南山大学）

英領マラヤの脱植民地化と戦後日本
都丸潤子（上智大学）

マレーシア紛争と日本
宮城大蔵（北海道大学）

マラヤ大学設立にみる植民地主義的知の制度化
井口由布（立命館アジア太平洋大学）

16:00ー16:20 コメント

永野隆行（獨協大学）

左右田直規（東京外国語大学）

16:20ー17:30 総合討論

17:30ー18:30 会員総会

18:30ー20:00 懇親会（上智会館第5会議室）

12月18日(日)

9:00— 受付開始

9:30—12:00 第2セッション 個別研究報告

9:30—10:20 報告1

ハートフォード時代のウィリアム・シェラベア
—英国人宣教師に対する回顧と展望—
綱島(三宅)郁子(同志社大学)

10:20—11:10 報告2

マレー人社会における公共圏の形成とイスラーム運動
塩崎悠輝(国際イスラーム大学マレーシア(啓示人文学部コミュニケーション学科2005年9月修士課程修了))

11:10—12:00 報告3

英国北ボルネオ特許会社の開発戦略と木材産業の発達(1881—1946)
—中国大陸鉄道の木材需要に対する特許会社の反応を中心として—
都築一子(自然環境保護教育アドバイザー)

12:00—13:00 昼食

**13:00—15:50 第3セッション 「2004年スマトラ沖地震・津波に見るさまざまな支援のかたち
——大規模自然災害における地域研究者の役割を考える——」**

13:00—14:20 報告

2004年スマトラ沖地震・津波によるナングロ・アチェ・ダルサラム州の建物被害
堀江啓(独立行政法人防災科学技術研究所・地震防災フロンティア研究センター)

紛争地における大規模自然災害

——情報の収集・発信状況からみるスマトラ沖地震・津波——
西芳実(大東文化大学国際関係学部非常勤講師)

スマトラ沖地震・津波とマレーシア

——被災国として、スマトラ地域に最も近い隣人として——
篠崎香織(ルクセンブルグ欧亜人文社会科学研究所マレーシア孝恩文化基金合同プロジェクト客員研究員)

14:20—14:30 休憩

14:30—15:50 コメント・総合討論

林勲男(国立民族学博物館)

15:50— 閉会の辞

セッション要旨

第1セッション 「脱植民地化をめぐる」

近年、植民地主義をめぐる二つの研究潮流が隆盛を極めています。一方で、実証史学の流れを汲む史料を駆使した脱植民地化研究があり、これは旧宗主国史料の公開を背景に、政治プロセスにおける宗主国の主導的役割を強調しています。他方で、実証主義を批判するポストコロニアル研究があり、これは近代批判思想を背景に、脱植民地化にもかかわらずまだ残る植民地的状況の批判を行っています。そして注目すべきことは、二つの潮流は相容れない研究の流れを受けながらも、ナショナリズムを是とした公定言説を告発している点では共通しており、相補的な関係にもあるということです。実際、エスニシティ、性、文化、環境などについて植民地文書を用いながらもその植民地的状況を批判的に考える、両潮流を融合した研究も現れています。

本シンポジウムではこうした研究状況を踏まえ、マレーシアの脱植民地化をめぐるいくつかの論点について再考する予定です。まず原不二夫会員に人民主導の脱植民地化闘争とその挫折についてお話をいただき、続いて都丸潤子会員、宮城大蔵氏にイギリス帝国主導のマラヤ(マレーシア)脱植民地化と日本人の関わりについて、さらに井口由布会員には植民地主義的な知がマレーシアに根付いていった過程についてお話いただくことを計画しています。こうした論点を考えることを通し、植民地文書を用いた実証史学、ポストコロニアル研究の両アプローチの可能性についても考えたいと思っています。(鈴木陽一)

第3セッション 「2004年スマトラ沖地震・津波に見るさまざまな支援のかたち——大規模自然災害における地域研究者の役割を考える——」

2004年スマトラ沖地震・津波では、支援の輪が自然災害に対する救援・支援活動の専門家にとどまらず、一般の多くの人々に広がり、募金をはじめとするさまざまな支援活動が国境を超えて試みられました。その背景には、被害の規模が想像を絶する大きさだったことに加えて、日本人にも比較的なじみのある観光地が被災地域に含まれていたこともあったように思います。このように多くの人々が支援に参加する状況で、被災地域やその周辺地域を専門とする研究者も、自然災害に対する専門的な知識や経験をほとんど持たないまま、これらの支援活動に参加し、あるいはそれを助けることになりました。

本シンポジウムでは、スマトラ沖地震・津波の発生から1年が経ち、復興・再建段階に入っている現在のアチェ州および北スマトラ州を対象に、被災地域とその周辺地域を専門とする研究者がこの1年間にどのような関わりをしてきたかを整理します。また、それを通じて、特定地域を研究対象とする研究者が、スマトラ沖地震・津波のような大規模自然災害に対し、自らの専門性を活かしてどのような関わり方があり得るかを検討します。同時に、長期化が予想されているアチェ州の復興・再建過程に対して、今後どのような取り組み方が可能なのか、ひいては、自然災害を含む大きな社会変動に対してその地域の研究者にどのような対応があり得るのかを考える機会ともなることを期待します。(西芳実)